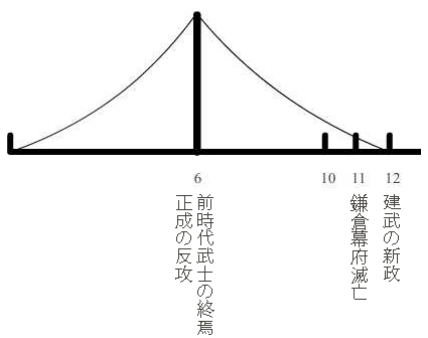
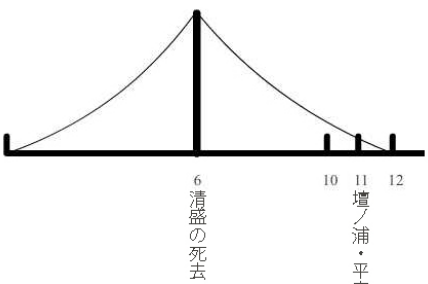
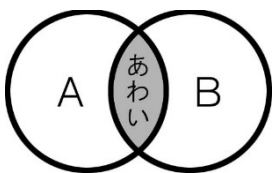


『平家物語』を読む

安田登

【一】はじめに

《「あらい」の時代とは》

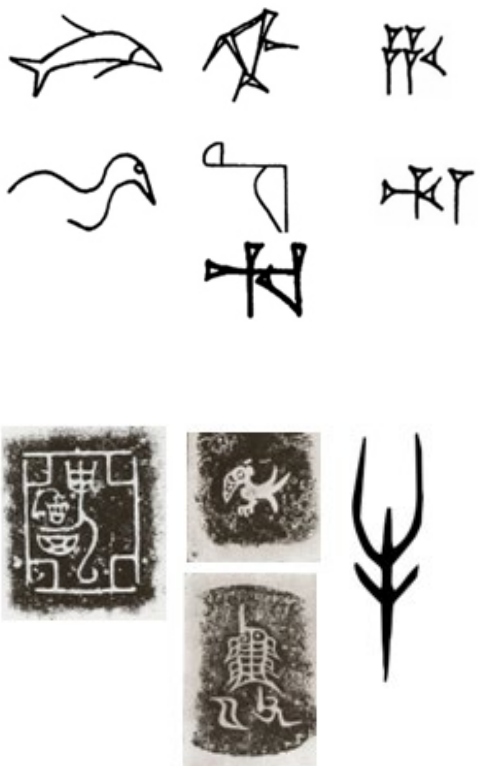


「いま」も「あらい」の時代

「リアルとバーチャル」↓「フィジカルとデジタル」

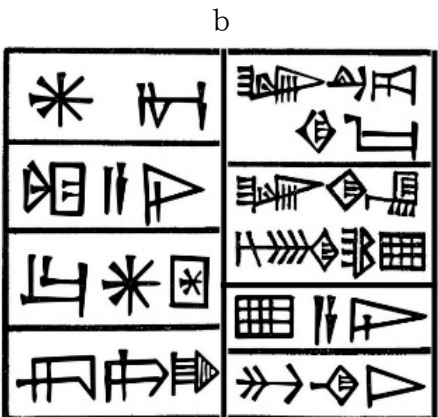
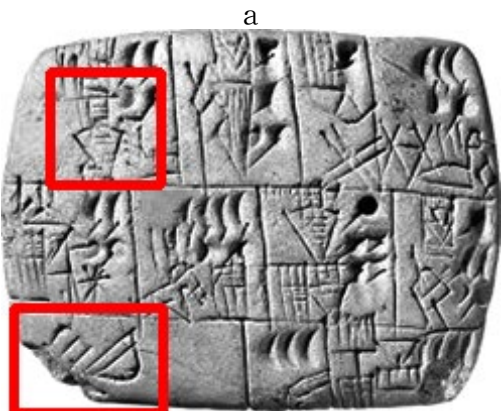
「文字」を超える

文字の誕生と二次元的思考の誕生

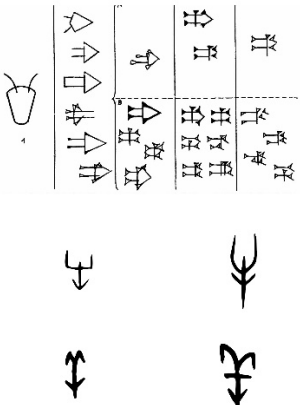


- 「記憶」の外在化↓脳に余裕↓「知」が生まれる
 - 「心」のプログラミングと「法」のプログラミング
- SOとしての「天命」
- 脳の外在化・拡張↓「知」と「識」↓AI
 身体の外在化・拡張↓「礼」と六芸 ↓ロボット、アンドロイド

文字⇄記憶の定着↓「心（時間を知る心的機能）」の発生



外部脳としての文字



【二】 祇園精舎

- (A) 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
- (B) 奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
猛き者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ

《五蘊》

色蘊 (巴: 梵: rūpa)

受蘊 (巴: 梵: vedana)

想蘊 (巴: sañña, 梵: saṃjñā)

行蘊 (巴: saṅkhara, 梵: saṃskāra)

識蘊 (巴: viññāṇa, 梵: vijñāna)

巴: パーリ語、 梵: サンスクリット語

『太平記』序

蒙窃(ひそ)かに古今の変化を取(と)つて、安危の所由を察(み)るに、
覆つて外(ほか)無きは、天の徳なり。明君これに体(てい)して国家を保つ。
載せて棄つること無きは、地の道なり。良臣これに則つて、社稷を守る。
もしその徳欠くる則(とき)は、位(ゐ)有りといへども、持(たも)たず。(中略)
其の道違(たが)ふ則(とき)は、威(ゐ)有りと雖も保(たも)たず。

蒙窃採古今之變化、察安危之来由、覆而無外天之徳也。明君体之保国家。載而無棄地之道也。
良臣則之守社稷。若夫其徳欠則雖有位不持。所謂夏桀走南巢、殷紂敗牧野。其道違則雖有威不
久。曾聽趙高刑咸陽、禄山亡鳳翔。是以前聖慎而得垂法於将来也。後昆顧而不取誠於既往乎。

天地・道徳

『論語』「為政」

子曰く、政を為すに徳を以つてすれば、譬えば北辰のその所に居て、衆星のこれを共(拱)するが如し。

子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之。

※参照「天上に星あり」↓巻四

【三】橋合戦

橋合戦

ここに 五智院但馬。

大長刀の鞘をはづいてただ一人。

橋の上にぞ 進んだる。

平家の方にはこれを見て、

「ただ射とれや、射とれや」とて、

差しつめ引きつめ散々に射けれど（も）、

但馬少しも騒がず、

上がる矢をばついくぐり、

下がる矢をば跳り越え、

向かつて来るをば長刀で切つて落とす。

敵も味方も見物す。

それよりしてこそ、『矢切りの但馬』とは言はれけれ。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | | | | | | | | |
| へ | い | け | の | か | た | に | は | ・ | こ | れ | を | 見 | て | — | |
| た | — | だ | — | 射 | 取 | れ | や | ・ | 射 | 取 | れ | と | て | — | |
| 差 | し | 詰 | め | 引 | き | 詰 | め | さ | ん | ざ | ん | に | 射 | け | れ |
| ど | タ | ジ | マ | す | こ | し | も | さ | — | わ | — | が | — | ず | — |
| ・ | 上 | が | る | 矢 | を | ば | — | ・ | つ | い | く | ぐ | り | — | — |
| ・ | 下 | が | る | 矢 | を | ば | — | ・ | お | ど | り | 越 | え | — | — |
| 向 | か | っ | て | 来 | る | を | ば | ・ | な | ぎ | な | た | で | — | — |
| ・ | 切 | っ | て | 落 | と | す | か | た | き | も | み | か | た | も | — |
| ・ | け | ん | ぶ | つ | す | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

【渡河】

足利、大音声をあげて、「つよき馬をば上手に立てよ、弱き馬をば下手になせ。馬の足の及ぼうほどは、手綱をくれて歩ませよ。はづまば、かい繰って泳がせよ。下らうものをば、弓の筈に取り付かせよ。手を取り組み、肩を並べて渡すべし。」

鞍壺によく乗り定まって、鎧を強う踏め。馬の頭、沈まば引きあげよ。いたう引いて引つ被くな。水、しとまば、三頭の上に乗るかかれ。馬には弱う、水には強うあたるべし。河中で弓引くな。敵射るとも相引すな。つねに鍔を傾けよ。いたう傾けて天辺、射さすな。かねに渡いておし落とさるな。水にしなうて渡せや渡せ」と掟て、三百余騎、一騎も流さず、向への岸へざつと渡す。

能『頼政』

シテ「忠綱。兵を。下知していはく。

地謡「水の逆巻く所をば。岩ありと知るべし。」

弱き馬をば下手に立てよ。

強きに水を。防がせよ。

流れん武者には弓弭を取らせ。

互に力を合はすべしと。

唯一人の。下知に依つて。

さばかりの大河なれども

一騎も流れず此方の岸に。

をめてあがれば味方の勢は。

我ながら踏みもためず。

半町ばかり。覚えしさとて。

切先を揃へて。こゝを最期と戦うたり。

1 2 3 4 5 6 7 8
みずのさかまくとこオろをば
いーわありとーしーるべし
よわきむまをばしたでに立て
つよきにみずをーふせーがせよ
ながれん武者には弓はすを取らせ
たがいにちからーを合わすべしと
ただいちにんのー下知によつて
さばーかりーのだいがなれど
もいっきものがれずこなたのきしに
をめて上がればみかたのせい
はん町 ばかりーおぼえずし
てー。きつさーきーをーそろえー
ー。ここをさいごとたたこうたーり

【四】平清盛の「あつち死」

●清盛の病氣

同じき(二月)二十七日、前の右大将宗盛卿、源氏追討のために、東国へすでに門出と聞こえしが、その夜半ばかりより、入道相国、違例の心地とて留まり給ひぬ。明くる二十八日より、重病をうけ給へりとて、京中、六波羅、「すは、しつる事よ」とぞ囁きける。

●病態

入道相国、病ひづき給ひし日よりして、水をだに喉へ入れ給はず。身の内の熱きこと、火をふくがごとし。ふし給へる所、四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。

ただ宣(のたま)ふ事とては、「あたあた」とばかりなり。少しもただ事とも見えざりけり。

比叡山より、千手井の水を汲み下ろし、石の舟に湛(たた)へて、それにて冷え給へば、水おびたたく沸き上がつて、ほどなく湯にぞなりにける。

もしや助かり給ふかと、寛(かけひ)の水を撒(ま)かせたれば、石や鉄などの焼けたるやうに、水ほとばしつて寄りつかず。おのづからもあたる水は、ほむらとなつて燃えければ、黒煙殿中に満ち満ちて、炎、渦巻いてあがりけり。

これや昔、法蔵僧都といひし人、閻王の請(しょう)に趣いて、母の生所(しょうじよ)を訪ねしに、閻王憐れみ給ひて、獄卒を相ひ副(そ)へて、焦熱地獄へつかはさる。鉄の門の内へさし入れば、流星などのごとくに、炎、空へたちあがり、多百由旬に及びけんも、今こそ思ひ知られけれ。

●二位殿の夢

入道相国の北の方、二位殿の夢に見給ひける事こそ恐ろしけれ。

猛火おびたたく燃えたる車を、門の内へやり入れたり。前後に立ちたるものは、或いは馬の面のやうなる物もあり、或いは牛の面のやうなる物もありけり。車の前には「無」といふ文字ばかり見えたる鉄の札をぞ立てたりける。

二位殿夢の心に、「あれはいづくよりぞ」と御尋ねあれば、「閻魔の庁より、平家入道殿の御迎ひに参つて候ふ」と申す。

「さてその札は何といふ札ぞ」と問はせ給へば、「南閻浮提(なんえんぶだい)金銅十六丈の盧遮那仏、焼き滅ぼし給へる罪によつて、無間の底に沈み給ふべき由、閻魔の庁に御定め候ふが、無間の無をば書かれて、間の字をば未だ書かれぬなり」とぞ申しける。

二位殿夢さめて、汗水になりつつ、これを人々に語り給へば、聞く人皆身の毛よだちけり。靈仏、靈社へ金銀七宝を投げ、馬、鞍、鎧、甲、弓矢、太刀に至るまで、取り出で運び出だし、祈られけれども、験(しるし)もなかりけり。男女(なんによ)の公達、跡枕にさしつどひて、いかにせんと歎き悲しみ給へども、かなふべしとも見えざりけり。

●清盛の遺言

同じき閏二月二日、二位殿あつう堪へ難けれども、入道相国の御枕によつて泣く泣く宣ひけるは、

「御有様見奉るに、日にそへて頼み少なうこそ見えさせ給へ。この世に思し召すことあらば、少しもののおぼえさせ給ふ時、仰せられ置け」とぞ宣ひける。

入道相国、さしも日ごろはゆゆしげにおはせしかども、まことに苦しげにて、息の下にて宣ひけるは、

「我、保元平治よりこの方、度々の朝敵を平らげ、勸賞身に余り、かたじけなくも一天の君の御外戚として丞相の位に至り、栄華子孫に及ぶ。今生の望みは、一事も残る所なし。ただし思ひ置く事としては、伊豆国の流人、前の兵衛の佐(すけ)頼朝が頸を見ざりつるこそやすからぬ。我いかにもなりなん後は、堂塔をも建て、孝養(きょうよう)をもすべからず。やがて討手を遣はし、頼朝が首を刎ねて、我が墓の前にかくべし。それぞ孝養にてあらんずる」と宣ひけるこそ罪深けれ。

●清盛の死

同じき四日、病に責められ、せめての事に板に水をいて、それにまろび給へども、助かる心地もし給はず。悶絶びやく地して、遂に「あつち死に」ぞし給ひける。

馬車の馳せ違ふ音、天も響き大地も揺るぐほどなり。一天の君、万乗の主(あるじ)の、いかなる御事ましますとも、これには過ぎじとぞ見えし。今年は六十四にぞなり給ふ。老死(おいじ)にといふべきにはあらねども、宿運忽ちに尽き給へば、大法秘法の効験もなく、神明三宝の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況んや凡慮においてをや。

命にかはり身にかはらんと忠を存ぜし数万の軍旅は、堂上堂下になみられたれども、これは目にも見えず、力にもかかはらぬ無常の殺鬼をば、暫時(さんじ)も戦ひかへさず、また帰り来ぬ四手の山、三瀬河、黄泉中有の旅の空に、ただ一所こそおもむき給ひけめ。

日頃作りおかれし罪業ばかりや獄卒となつて、迎へにも来たりけん。あはれなりし事どもなり。

さてしもあるべきならねば、同じき七日、愛宕(おたぎ)にて煙になし奉り、骨(こつ)をば円実法眼、首にかけ、摂津(つの)国へ下り、経の島にぞ納めける。

さしも日本一州に名をあげ、威をふるひし人なれども、身はひと時の煙となつて、炎は空に立ちのぼり、かばねはしばしやすらひて、浜の砂(まさご)にたはぶれつつ、むなしき土とぞなり給ふ。

※参考

『往生要集』源信和尚 寛和元年(985年) 平安中期

一は厭離穢土、二は欣求浄土、三は極楽証拠、四は正修念仏、五は助念方法、六は別時念仏、七は念仏利益、八は念仏証拠、九は往生諸業、十は問答料簡なり。これを座右に置いて、廃忘に備へん。

第二 欣求浄土

【序】大文第二に、欣求浄土といふは、極樂の依正は功德無量なり。百劫・千劫に説くとも尽すことあたはず。算分・喻分もまた知るところにあらず。しかも『群疑論』には三十種の益を明かし、『安国の抄』には二十四の樂を標せり。すでに知りぬ。

称揚はただ人の心にあり。いま十の樂を挙げて浄土を讃ずること、なほ一毛をもつて大海を滌らすごとし。

一には聖衆來迎の樂、二には蓮華初開の樂、三には身相神通の樂、四には五妙境界の樂、五には快樂無退の樂、六には引接結縁の樂、七には聖衆俱会の樂、八には見仏聞法の樂、九には隨心供仏の樂、十には増進仏道の樂なり。

【一・聖衆來迎の樂】第一に聖衆來迎の樂といふは、おほよそ惡業の人は、命尽くる時に、風・火先づ去る。ゆゑに動熱して苦多し。善行の人は、命尽くる時に、地・水先づ去る。ゆゑに緩慢として苦なし。

いかにいはんや念仏の功積り、運心年深きものは、命終の時に臨みて大喜おのづから生ず。しかる所以は、弥陀如来、本願をもつてのゆゑに、もろもろの菩薩、百千の比丘衆と、大光明を放ちて、皓然として目の前にまします。時に大悲觀世音、百福莊嚴の手を申べ、宝の蓮台を擎げて行者の前に至りたまひ、大勢至菩薩、無量の聖衆と、同時に讚嘆して手を授けて引接したまふ。

この時に行者、まのあたりみづからこれを見て、心中に歡喜し、身心安樂なること禪定に入るがごとし。

まさに知るべし、草菴に瞑目のあひだはすなはちこれ蓮台結跏の程なり。すなはち弥陀仏の後に従ひ、菩薩衆のなかにありて、一念のあひだに、西方の極樂世界に生ずることを得。(略)

【五】敦盛の最期

一の谷の戦破れにしかば、武藏国の住人、熊谷次郎直実、

「平家の公達の助け船に乗らんとて、汀の方へや落ち給ふ事もやおはすらん、あはれよき大將軍に組まばや」

とて、磯の方へ歩ます所に、練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄(もよぎ)匂ひの鎧着て、鍬形うつたる甲の緒をしめ、金(こがね)作りの太刀をはき、二十四さいたる截生(きりふ)の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢茸毛なる馬に、金覆輪(きんぷくりん)の鞍置いて乗つたる武者一騎、沖なる船に目をかけて、海へざつとうち入り、五六段(たん)ばかりぞ泳いだるを、熊谷、

「あれは大將軍とこそ見参らせ候へ。まさなうも敵に後ろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ」

と、扇を挙げて招きければ、招かれて取つて返し、渚(なぎさ)に打ち上がらんとし給ふ所に、熊谷波うちぎはにて押し並べ、ひつ組んで、どうど落つ。

取つて押さへて首をかかんと内甲を押しあふのけて見ければ、年の齡十六七ばかんなるが、

薄化粧して金黒（かねぐろ）なり。我が子の小次郎が齢ほどにて、容顔まことに美麗なり。

「そもそもいかなる人にてましまし候ふやらん。名乗らせ給へ。助け参らせんと申しければ、

「かういふわ殿は誰ぞ」

と問ひ給へば、熊谷

「ものその数にては候はねども、武蔵国の住人、熊谷次郎直実」

と名乗り申す。

「さては汝がためにはよい敵ぞ。存ずる旨あれば名乗る事はあるまじ。名乗らずとも首をとつて人に問へ。見知らうずる」

とぞ宣ひける。

熊谷、

「あつぱれ大將軍や。この人一人討ち奉るとも、負くべき戦に勝つ事もよもあらじ。また討ち奉らずとも、勝つべき戦に負くこともよもあらじ。我が子の小次郎が薄手負ひたるをだにも、直実は心苦しう思ふぞかし。この殿の父、討たれ給ひぬと聞いて、いかばかりかは歎き給はんずらん。あつぱれたすけ参らせばや」

と思ひて、後ろをかへりみたりければ、土肥、梶原五十騎ばかりで続いたり。

熊谷、涙をはらはらと流いて、

「助け参らせんと存じ候へども、味方の兵（つはもの）ども雲霞のごとくに候へば、よものがし参らせ候はじ。同じくは、直実が手にかけ奉て、後の御孝養（おんけうやう）をこそつかまつり候はめ」

と申しければ、

「ただ何さまにも、とうとう首をとれ」

とぞ宣ひける。

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとおぼえず、目もくれ心も消え果てて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く首をぞ掻いてんげる。

「あはれ弓矢とる身ほど口惜しかりける事はなし。武芸の家に生まれずは、何とてかただ今かかる憂き目をば見るべき。情けなうも討ち奉るものかな」

とかきくどき、袖を顔に押し当てて、さめざめとぞ泣きあたる。

ややあつて、鎧直垂をとつて首をつつまんとしけるに、錦の袋に入れたりける笛をぞ腰にさされたる。

「あないとし、この暁城の内にて、管弦し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時味方に東国より上つたる勢何万騎あるらめども、戦の陣へ笛持つ人はよもあらじ、上臈はなほもやさしかりけり」

とて、これを大將軍（九郎義経）の見参（げんざん）に入れたりければ、見る人涙を流しけり。

後に聞けば、修理大夫（だいぶ）経盛の子息大夫敦盛とて、生年十七にぞなられる。それよりしてこそ、熊谷が発心の心は進みけれ。

件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し給はられたりしが、経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝（さえだ）とぞ申しける。狂言綺語の理と言ひながら、遂に讚仏乗の因となるこそあはれなれ。

【六】 経正（政）

●経正の都落ち「寿永二年」

修理大夫（だいぶ） 経盛の子息、皇后宮亮（すけ）、経正、幼少にては仁和寺の御室の御所にて童形にて候はれしかば、かかる忽劇（そうげき）の中にもその御名残きつと思ひ出でて、侍五六騎召し具して、仁和寺殿（どの）へ馳せ参り、門前にて馬より下り、申し入れられけるは、

「一門運尽きて今日すでに帝都をまかり出で候ふ。憂き世に思ひ残す事とは、ただ君の御名残ばかりなり。八歳の時参り始め候うて、十三で元服つかまつり候ひしまでは、相労る事（＝病氣）の候はんよりほかは、御前を立ち去る事も候ざりしに、今日より後、西海千里の波に赴いてまたいづれの日、いづれの時帰り参るべしとおぼえぬこそ、口惜しく候へ。今一度御前へ参つて、君をも見参らせたう候へども、すでに甲冑を鎧ひ弓矢を帶し、あらぬ様なる装ひにまかりなつて候へば、憚り存じ候ふ」とぞ申されける。

御室あはれに思し召し、「ただその姿を改めずして参れ」とこそ仰せけれ。

経正その日は、赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧着て、長覆輪の太刀を帶き、切斑の矢負ひ、滋藤の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎ高紐にかけ、御坪の白洲に畏まる。

御室やがて御出あつて、御簾（みす）高く揚げさせ、「これへこれへ」と召されければ、大床へこそ参られけれ。供に具せられたる藤兵衛・有教（ありのり）を召す。赤地の錦の袋に入れたる御琵琶持つて参りたり。

経正これを取り次いで、御前にさし置き、申されけるは、「先年下し預かつて候ひし青山持たせて参つて候ふ。余りに名残は惜しう候へども、さしもの名物を田舎の塵になさん事、口惜しう候ふ。もし不思議に運命開けて、また都へ立ち帰る事候はば、その時こそなほ下し預かり候はめ」と泣く泣く申されければ、御室あはれに思し召し、一首の御詠をあそばいて下されけり。

あかずして別るる君が名残をば後の形見につつみてぞおく

経正御硯下されて

呉竹の笥の水はかかれどもなほすみあかぬ宮の中かな

さて暇申して出でられけるに、数輩の童形、出世者、坊官、侍僧に至るまで、経正の袂にすぎり袖を控へて、名残を惜しみ涙を流さぬはなかりけり。

その中にも経正の幼少の時、小師（こし）でおはせし大納言法印行慶と申すは、葉室の¹大納言、光頼卿の御子なり。余りに名残を惜しみて、桂川の端までうち送り、さてもあるべきならねば、それより暇乞うて泣く泣く別れ給ふに、法印かうぞ思ひ続け給ふ。

あはれなり老木若木も山桜おくれ先だち花は残らじ

経正の返事には、

旅衣よなよな袖をかた敷きて思へば我は遠くゆきなん

さて巻いて持たせられたる赤旗ざつとさし揚げたり。あそこここに控へて待ち奉る侍ども、「あはや」とて馳せ集まり、百騎ばかり鞭をあげ、駒を早めて、ほどなく行幸に追いつき奉る。

●青山沙汰

この経正十七の年、宇佐の勅使を承つて下られけるに、その時青山を賜はつて、宇佐へ参り、御殿に向かひ奉り秘曲を弾き給ひしかば、いつ聞き馴れたる事はなけれども、供の宮人おしなべて、緑衣（りよくい）の袖をぞ絞りける。聞き知らぬ奴までも、村雨とはまがはじな。めでたかりし事どもなり。

かの青山と申す御琵琶は、昔、仁明（にんみょう）天皇の御宇、嘉祥三年の春、掃部頭（かもんべのかみ）貞敏（ていびん）渡唐の時、大唐の琵琶の博士、廉承武（れんしやうぶ）に逢ひ、三曲を伝へて帰朝せしに、玄上、獅子丸、青山、三面の琵琶を相伝して渡りけるが、竜神や惜しみ給ひけん、波風荒く立ちければ、獅子丸をば海底に沈め、今二面の琵琶を渡して、我が朝の帝の御宝とす。

村上の聖代（せいいたい）応和の頃ほひ、三五夜中新月白く冴え、涼風颯々たりし夜（よ）半ばに、帝、清涼殿にして玄上をぞ遊ばされける時に、影のごとくなる者御前に参じて、優にけだかき声にて唱歌をめでたうつかまつる。

帝、御琵琶をさしおかせ給ひて、「そもそも汝はいかなる者ぞ。いづくより来たれるぞ」と御尋ねあれば、

「これは昔、貞敏に三曲を伝へ候ひし大唐の琵琶の博士、廉承武と申す者で候ふが、三曲の中秘曲を一曲残せるによつて、魔道に沈淪（ちんりん）つかまつつて候ふ。今、御琵琶の撥音、妙（たへ）に聞こえ侍（はべ）る間、参入つかまつる所なり。願はくはこの曲を君に授け奉り、仏果菩提を証すべき」由申して、御前に立てられたる青山を取り、転手をねぢて秘曲を君に授け奉る。三曲の中、上玄、石上（せきしよう）これなり。

その後は君も臣も恐れさせ給ひて、この琵琶を遊ばし弾く事もせさせ給はず。御室へ参らせられたりけるを、経正の幼少の時、御最愛の童形たるによつて下し預かりたりけるとかや。

甲は紫藤の甲、夏山の峰の緑の木の間より、有明の月の出づるを撥面にかかれたりける故にこそ、青山とはつけられたれ。玄上にも相劣らぬ希代の名物なりけり。

経政（つねまさ）上歌

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

ことにまた— かのオせいゝざんと いうびわ— を—

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

かのオせいゝざんと いうびわア を

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

もおじゃのために たむけつ つーウ

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

おなじくいと たけエの

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

こ—オエエも— オぶつじを なしそえエ—て—エエ—

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

にちにちややアのの—オ りのかど—オ

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

きせんのみちも あアまねエ—しいや

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

きせん—の—オ みちも あまね—エ—しいや—

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

クリ (ミト)
上ウ (レ)
上 (F)

中ウ (ラ)
中 (ソ)

下 (レ)

【七】『耳なし芳一（小泉八雲）』より

●平家の亡霊たちのお願い

明夜以降、六夜、ここに来て、平家物語を語ってほしい。

そうしたら主上はちゃんと帰還されることを得る (make his august return-journey)。

●住職の言ったこと、したこと

このような目にあったのはお前の琵琶の腕が素晴らしかった (Your wonderful skill in music) から。

しかし、死者の言いなりになったならばお前の体は八つ裂きにされよう。

お前の体に『般若心経』を書こう。

書かれたら縁側 (on the verandah) に座り、何があっても答えてはならない。

●住職の言い訳

"Poor, poor Hoichi!" the priest exclaimed,—"all my fault!—my very grievous fault!...

「可愛そうに芳一」住職は叫んだ。「みな、私の手落ちだ。ひどい手落ちだ」

Everywhere upon your body the holy texts had been written— except upon your ears!

身体中くまなく経文を書いた——が、耳だけが残っていた！

I trusted my acolyte to do that part of the work;

わしは従者を信頼して、そのパート（耳）に経文を書かせたのだ。

and it was very, very wrong of me not to have made sure that he had done it!...

しかし、その失敗は、ヤツがちゃんと書いたかどうかを確かめなかったことだ。

Well, the matter cannot now be helped:—

が、まあ、それはもう、しようのない事じゃないか。

we can only try to heal your hurts as soon as possible...

今できることは、できるだけ早く傷を治すようにトライすることだけだ。

Cheer up, friend!—

元気を出しなよ、フレンドよ！

the danger is now well over.

いまや危険は去った。

You will never again be troubled by those visitors."

もう二度とあのような客人に煩わされる事はないのだ。

●後日談

With the aid of a good doctor, Hoichi soon recovered from his injuries.

The story of his strange adventure spread far and wide, and soon made him famous.

Many noble persons went to Akamagaseki to hear him recite;

and large presents of money were given to him,— so that he became a wealthy man...

But from the time of his adventure,

he was known only by the appellation of Mimi-nashi-Hoichi: "Hoichi—the-Earless."